V-5　石巻市釜谷地区釜谷集落　　2012 年 12 月 10 日（月）

報 告 者 名　岡山　卓矢　　被調査者生年　① 1930 年（女）
調 査 者 名　岡山　卓矢　　被調査者属性　①釜谷住民
補助調査者　土佐美菜実

被調査者（主な聞き書きは話者①から）

＊話者②　1948 年生（女）、話者①の娘

観音講について

結婚後すぐに夫は契約講へ、話者①は観音講へ加入した。話者①が 48 歳の頃、長女が婿を貰ったのを機に契約講・観音講を長女夫婦に代替わりした。T 家のお婆さん（V-6、V-10 の話者①）などは現在 85 歳で先輩にあたり、昔の話をよく知っているはずである。

観音講は既婚女性が加入する講で、釜谷の上・中・下それぞれにあり、いずれも年 2 回春と秋に講が開かれる。各講 30 軒ほどが加入していた。春は 3 月だか 4 月、秋は 10 月に講日がある。春はオカノサン（お観音さん、観音寺）、秋は地蔵院に参拝したあと、停前の家を宿にお精進料理を食べる。観音講は安産や子供を授かることを願ってのものである。後に簡略化されたが、講員はこれらに着物と羽織を着けて参加した。このため釜谷へ来る嫁は、観音講用のこれら着物を嫁入り道具として持参しなければならないとされていた。料理は停前が食材を準備し、講員達から経費を徴収する。各戸のお姑さんたちは、観音講に嫁が出るために小遣いを渡すものだった。

話者①は春がオカノサン、秋が地蔵院への参拝と記憶しているが、長女である話者②の記憶では観音講で地蔵院に参拝したことはなく、春と秋の違いは観音寺に参拝するか、観音寺前の石碑に参拝するかだったと覚えているとのこと。9 時や 10 時など、各講で決められている集合時間になるとそれぞれ参拝し、各自お賽銭を入れて拝む。観音寺住職に拝んでもらうなどということはせず、講員達が数人ずつ参拝し、他地区の観音講員と重なることもよくある。

参拝が終わると、宿の家へ移動して、停前が用意した精進料理を食べる。観音講では春秋それぞれに停前を 7 人ずつ輪番を定め、このうち 1 軒を宿にして飲み食いの会場にする。宿決めは、停前間の話し合いで臨機応変に決定され、どの家かに固定されるということは無い。そちらは年寄りがいて座敷を開けられないから今年はうちが引き受けよう、くらいの感じで宿は決まるし、都合が悪く停前を引き受けられない講員があれば別の講員が交代で代わることもあった。お姑さんも、自分も経験してきたことなので宿を受けることには理解がある。また家の並び上、話者①の現役時代は近所 6 軒で停前を組んだ時期もあった。これは講員の数と、家並みの端に当たる立地から、そうしないと離れた 1 軒を加えねばならないことによる。この 1 人足りなかった時期は、「うちの班は 6 人で大丈夫だよ」として停前 6 人体制にしていた。

観音講の飲み食いは、昼飯と夕飯の 2 食をとる 1 日掛りのものである。途中抜け出して用足しをしたあとでまた戻ったり、小さい子供を連れてきて遊ばせたりと、自由な雰囲気である。観音講は嫁さん達の遊びの日・休みの日・自由時間であった。

話者①が代替わりをして、世代が若くなってからの観音講は、朝に参拝を済ませたあとは移動観音講といって追分温泉等へ 1 泊掛りの旅行に出たり、日にちを日曜に移したりといった変化があった。近年は春は参拝だけで終わり、秋はオカノサンへの参拝後に移動観音講とするように簡略化されていた。ただし話者①の代でも 1 度だけ、移動観音講をしたことがあった。52 歳になる末の息子が幼かったので、約 50 年前のことであろう。小牛田経由

で汽車を乗り換えて鳴子へ行ったが、春の観音講で寒かったため息子に着物を厚着させた思い出がある。

上の観音講は、通りの上分 20 戸ほどと、裏通りの 10 戸ほどの女性が加入していた。なお裏通り 20 戸ほどのうち、家並みに合わせ約 10 戸くらいずつ上と下に分けて契約講・観音講に属していた。谷地中については、釜谷に混じるようになってからは下に加えられた。入釜谷については、稲荷神社の例祭以外では釜谷と行事が一緒になることはない。入釜谷にも観音講はあるが、日にちも異なっていた。

10 年ほど前に、観音講は上中下の 3 講体制から、釜谷で 1 つの講に合併した。これは町に働きに出るお嫁さんが増えて観音講の人数が減ってきたことによる。しかし合併後の移動観音講は釜谷全体で行くということは少なく、移動に関しては 3 講それぞれに出かけることが多い。

観音講を抜けた女性達が集まる組織を作った時期もあったが、数年だけで定着しなかった。

観音講のハツデキ

観音講に初めて参加することをハツデキという。初めて出て来るの意味で初出来だと思うが、詳しくは分からない。ハツデキの際は、近所の先輩講員が連れて行ってくれ、宿で皆に紹介してくれる。新入講員は末席に着いて正座し、この紹介を受ける。ハツデキにあたってお姑さんは、隣近所で一番年上の講員にこの紹介役を頼むものである。話者①は観音講に加入してしばらくの間、自分より若い新入講員がなかった。講員の序列は年齢で決まるので、年上の新入講員が入ったことはあったが、これは加入した時だけ一番下になるもののその後は自分より座順も年齢に沿う。このため話者①は一番下っ端だった時期が長かった。講員として古くなると途中で帰ることも出来るようになるが、下っ端のうちは行事が終わるまで帰ることは出来ない。

話者①の長女の話者②は、観音講へ入ったばかりの頃はこれが窮屈で嫌だったものの、年々慣れてくると楽しみな行事になってくるという。

一方で観音講をアガるにあたっては特に儀礼は無い。息子に嫁を貰うか、講員自身が満 48 歳になるとアガるものの、この年齢は観音講によって異なる。また話者②によればアガる年齢は 45 歳である。息子がなかなか結婚しない家もあっていつまでも観音講員ということがあるので、あまり年なら無理させないようにとの配慮による。ただし決まりという訳ではないが、誰かがアガる年には停前が段取りをして旅行（移動観音講）を組むことがよくあった。毎回移動観音講となったのも、こうしたケースが続くうち段々と毎度のことになったものである。

観音講の精進料理

観音講で振舞われる精進料理は、御飯とお汁（味噌汁）のほか、ヒラ・サラ・ニと呼ばれる 3 種を含めた 5 品である。ヒラは、平たい蓋付き椀に盛られた料理で、胡桃豆腐・油揚げ・こんにゃく・筍・しいたけを煮て葛あんかけにしたものである。しいたけは丸のまま、他の具材は細く切ってある。サラは、油揚げ・こんにゃくを煮て胡桃和えにしたものである。ニは、がんもどきと糸こんにゃくだか春雨を具にした、醤油汁に三つ葉を散らした料理である。これらは法事で振舞う精進料理の練習としての意味合いがある。このお膳は上の共有の膳椀に盛り付けられた。共有の膳椀は上・中・下それぞれ持っていたが、上の場合は大川小学校近くに岩で出来た倉庫があり、これを利用していた。また契約講が総会で使う三々九度の盃などもここに収められていた。膳椀は、後に観音講が上中下で 1 つに合わさったあとは上として要らなくなったため、一組ずつ講員達に分けられた。また後々観音講の精進料理は手作りから仕出しへ変わったが、仕出しでもヒラなどの献立は変わらない。

契約講と女性

契約講の総会で料理を食べる場合、お給仕やお酌は停前の男性の仕事で、その妻達は裏で料理を作るのが仕事となる。家によっては息子が結婚しないために、観音講をアガった母親が手伝いに加わることもある。日待ちは獅子の出る 1 月、2 月のオヨウカの行事に先だって行なわれ、これは獅子を出す行事にあたって身を清める必要から開かれるものである。これら日待ちの停前も契約講の行事と同様に妻達が料理作りをする。なお契約講の総会は、話者②夫婦が結婚して契約講･観音講へ加入してすぐの頃に春（2〜3 月頃）と秋の年 2 回制から、秋のみ開催に変わった。

上では、契約講の寄り合いでのお膳が酒や魚を伴う結婚式のものと同様であるのに対し、観音講のお膳は酒や魚を使わない、法事のものと同じ精進料理である。契約講の寄り合いでは、停前から１人が謡や三々九度を披露する場面があるが、謡の曲目も結婚式で謡うのと同じ高砂などで、これらは儀式の練習になるものである。

停前は寄合前日に講員たちから米集めをし、また吉次（赤い食用魚）などの食材を準備する。

初午について

２月の５日と何日だかに午の日があたる年は、火事になるとか火が速いとか言われる。そういう年は火防せのために２月５日に初午（水かぶり）をする。本来は２月８日の春祈祷とは別の行事だったが、後に春祈祷に合併されたのでなかったかと思う。

大般若巡行と春祈祷について

１月８日の大般若の行列は、和尚が先頭で長い白ひげのようなものを持ち、次に三方に米や刀を乗せたものを男達が白の手袋を着けて運ぶ。経を運ぶ人達はとてもそれが重いため、肩にタオルなどを当てて歩く。男は５時頃に集まり、着物を尻はしょりにして歩く。尻はしょりとは、着物の裾をまくって帯の上から挟み込む着方で、下に股引きを履き、黒の足袋とワラジを着ける。寒いため、人によっては厚手の股引きを履いたり、数枚重ね履きしたりする。またこのワラジをお姑さんがつけてあげていたのを覚えている。

大般若では行列の前に獅子が家々を回る。獅子は茶の間の縁側から家に入り、玄関から抜けていく。ドンドンと太鼓が聞こえてくるので、獅子と行列が近づいてきたと分かる。話者①の家では、獅子を迎えるのに玄関にお膳を用意し、線香と灯明をつけて待った。またあらかじめ玄関先を箒で掃き塩を撒いて清めておく。オハツ（御初穂）を集めに来る人も家々を回る。獅子は座敷から家に入り玄関へ回ってくるので、家の人達は玄関で待ち、獅子にパクっと噛んでもらう。お経を担ぐ行列と、その後ろに付く契約講をアガった元幹部達の行列は、この日は忙しいため獅子のように各戸へ寄ることなく、酒も飲まず行進する。春祈祷は、韮島の秋葉山の石碑で祈祷後、獅子が各戸をまわる。なお韮島は元は島だったとも言われている。一応各家はお神酒や料理の用意はするものの、契約講員が休みに寄る家はそれぞれで、全戸へ順に寄るのではない。春祈祷は 14 時ころまでに終わるが、全戸に寄っては行事が終わらないからである。正月、２月のオヨウカは契約講非加入の家含め、釜谷全戸をまわる。谷地中もまわるが、ただし入釜谷は回らない。

お正月のオヨウカ（御八日）は獅子は下から来るもので、朝 10 時頃までに話者①宅へ来る。反対に２月のオヨウカは、獅子は玄関から入り座敷を抜けて外へ出る。春祈祷は１日がかりの行事である点もお正月のオヨウカと違う。また、オヨウカの日待ちはどちらもお膳を風呂敷に包んで持参するが、正月は前の晩に日待ち、２月は当日朝に日待ちをする。持ち寄る料理はどちらも精進料理である。前の晩といっても、翌日は早朝から行事なので泊まり込みで日待ちをするのでなく、早めに解散となる。

春祈祷では各戸は子供にお菓子を配る。子供達はそれぞれナイロン袋を持って獅子について家々をまわり、お菓子を集めるものである。亡くなった孫も、直前の春祈祷では袋一杯にお菓子を集め、これが誰某さんのところで貰ったなどと話して喜んでいた。また中にある料理屋は、おにぎりやカップラーメンを毎年振る舞うようにしていて、いつもここへ人が溜まる。獅子は家々を回る際に特に踊ることはないのだが、この料理屋のところでは多く人が集まるためよく獅子を囃し立てる人がいて、これに獅子も応える。赤い派手な服を着て踊りに加わる男の人らもいて楽しいものである。獅子は頭を持つ者と、尻尾を持つ者の２人が入るが、「誰が入ってるの？」「パパだよ」などの子供との会話は定番の楽しみ方である。話者①は上の住人だが、この料理屋での休みは皆が集まって面白く、よく見に行ったものである。

話者①について

尾崎出身である話者①は、昭和 25 年（1950）に結婚し釜谷へ嫁に来た。20 歳になる年であったが、成人式前に嫁いだことを覚えている。夫とは、それまで青年団の活動で顔を知っていた程度の間柄だった。顔見知りとはいえ、そう親しい付き合いは無かった同士である。仲人の紹介で決まった縁談である。夫は５歳年上の大正 14 年

（1925）生まれで、元契約講長である。

結婚当初は、話者①の家は豆腐屋と、13 枚ほどの田の兼業をしていた。昭和 30 年代は釜谷の家々は皆出稼ぎをしていいお金をとったが、夫はほとんど出稼ぎをしなかった。昭和 35 年（1960）に釜谷に水道を通す事業が完了し、夫はこれを主導する立場だった。これは豆腐屋で使うために隣家と 2 軒で井戸から取水する水道を設置した経験があり、これを上地区、ひいては釜谷地区へと拡大した経緯による。ただし井戸では賄いきれないので、釜谷の水道の水源は、沢の水を消毒して用いた。その数人のメンバーは皆出稼ぎ全盛の中、釜谷に残って仕事をしていた人達で、水道の管理や田の消毒などを各戸から金をとって請け負っていた。この報酬はその日のうちに飲み食いして酒代に使い果たす程度のものだった。なお当初の予定では 1 年で完成する予定だった水道は、結局 1 年を少しオーバーした。

夫も述べ数か月程度、水道の仕事があるのを隠れて出稼ぎしたこともあった。水道を引いてからしばらくして、保健所の指導がやかましくなり、各種機械化をしなければならなくなってきたため豆腐屋を廃業した。豆腐屋をやめてからは、息子が大工を始め、夫も多少これを手伝いはしたものの農業が中心だった。釜谷で出稼ぎといえば当時は東京での線路工夫などが多かった。これは先に行った釜谷の人が親分になって皆を呼んだからである。

夫は 60 歳の時に脳梗塞を患ったが、軽度で大事には至らず、回復後は 10 年以上も田仕事で働いたし、老人会のゲートボールにも加わっていた。しかし津波後は今になって後遺症がでたのか、寝たきりになってしまっている。その世話があるため話者①も遠出を控えている。津波で末娘の子である孫 2 人とその夫を亡くしたが、その葬儀も告別式にちらっと出ただけである。津波後は 10 回ほどしか出掛けることはしておらず、釜谷に行ったのも 2 回だけである。仮設には夫と 2 人暮らしだが、隣には長女夫婦が住み、また仮設の別の列にも娘と孫 1 人が暮らしている。昼は話者①と夫だけで食事をするが、朝晩の食事はこれらの家族と一緒に皆でとる。

いつも一緒に 4 人組の友人達がいたが、自分以外は津波で亡くなった。地震の時も 4 人とも釜谷の診療所にいたが、皆は診療所 2 階に、話者①は注射のため 1 階に降りていた。話者①だけが夫の様子を見るために家へ戻り、水道が止まるだろうからと容器を集めて水を溜める作業をした。すると長面から警報車が来て、「長面に津波が来たから避難しなさい」とマイクで放送してきた。逃げる際に話者①は診察券や多少の小遣い、位牌などを持っていこうとしたが長女に投げ捨てられ、結果として逃げるのが間に合った。長女の運転する車で夫とともに逃げる途中、末娘の夫が、来なくてもいいのに職場から戻ってくるところに会った。3 人へ雄勝方面へ逃げるように言って、末娘の夫は釜谷へ向い亡くなった。既に水が溜まっているところを構わず走り抜けたが、抜けられたのは自分達の車よりあとは 4、5 台までだった。

津波のあとで釜谷に車で戻ると、山からずぶ濡れで顔に血の痕をつけた末娘が降りて来た。娘は津波に流されるもそのまま山へ流れ着き、竹を掴んで波に耐えた。その際足元から「助けて」と子供の声がするので見ると小学生の女の子だった。これを掴んだものの引き上げられずにいたが、しばらくして釜谷の男の人が 1 人来て助けてくれたそうだ。末娘は、家族は誰も生きていないだろうと思っていたところ 3 人に会って驚いたようだった。他に男で生き残ったのは、仕事で日中釜谷にいなかった人ばかりである。また 1 人になってしまった人が多い中、家族として残っているのは話者①のほか、A や T の家くらいだろう。A のお婆さんは商品のパンと 10 万円ほどの現

写真 1　仮設住宅への行商

写真 2　魚介類の干物作り

金を持って交流会館へ逃げようとしたところ誰かに「ダメだ、後ろに（波が）来てる」と声を掛けられ、そのまま流された。しかしパンなど荷物と一緒に山へ流れ着き、晩に皆でパンを食べたそうだ。

話者①は震災の後避難所で普段 110 ほどの血圧が 180 まで上がって動悸がし、また夫は 12 日間避難所で寝ているうちに歩けなくなった。避難所のトイレは行列待ちが長く、自由に用を足すことが出来ないからとおむつにした末のことである。昔患った脳梗塞が、今になって影響したのだと思う。